

古代史教養講座 創立1995

松戸市常盤平 2-18-9

〒270-2261 電話 (047)384-5728 <http://www.geocities.jp/kdil1995>
振込銀行口座 三井住友銀行 飯田橋支店 普通預金 6355550 口座名・古代史教養講座

ゼミは7月も開催します

7月も同様の感染対策を講じて実施します。就いては下記の通りご案内しますので、諸対策に協力の上、ご参加下さい。

<感染対策>

- 1、会館入口に消毒液と検温器が設置してあります。
○各自で検温器で体温を測定して下さい。37.5℃以上の方は入室禁止となります。
- 2、不織布マスク着用
○プラスチック製フェースシールドやマウスガード着用は予防効果無しですので、入室をお断りします。
- 3、最新のコロナワクチン接種完了者は入場可能です。
ゼミ会費納金時に、3回目又は4回目接種完了の旨を口頭で提示願います。
- 4、会議室は強力換気扇と窓開放で換気をします。
- 5、3人席の机に原則2人で使用して下さい。
- 6、講演台にはプラスチック製の衝立を常備します。
衝立は、ゼミ講演者の飛沫拡散防止用です。
- 7、川崎会(ゼミ発表者を囲むゼミ後の懇親会)と世話人会は当分の間休会とします。
- 8、感染等に付ては自己責任で対処をお願いします。
- 9、尚、当ニュース発行後に、感染が激増し「緊急事態制限」等による行動制限が発表された場合は、中止となります。中止の場合は、HP上の緊急告知やメール等でお知らせします。

7月2日ゼミ邪馬台国研究史-昭和期

—紹介文:小川 孝一郎会員記—

◆昭和期における邪馬台国研究史を概観するに際し、昭和期を20年ごとに前期・中期・後期に三分割してそれぞれの特徴を整理すると次のようになります。

《昭和前期一初年から敗戦まで》

◇時に戦雲低く垂れこめつつあり、邪馬台国論争、特にその位置論争は下火になり、学界のテーマで

特筆すべきものとしては生口問題が挙げられます。尚、これは史学会に唯物史観が浸透し始めたことと関係があります。

◇またこのころから考古学界の成果が史学会において注目されるようになりました。

《昭和中期一戦後から昭和40年ころまで》

◇戦後思想統制が無くなり、皇国史観の呪縛から解放されて邪馬台国論のみならず各分野で自由な史学論争が展開されるようになりました。

◇この期の史学会における大きな特徴としては、唯物史観的歴史観の導入と浸透が挙げられます。唯物史観は戦前生口問題を機に広がりを見せたものの、太平洋戦争で一時中断しました。それが戦後思想の制約が外されたことによって大きく花開きました。

特に古代史分野においては、唯物史観に基づく国家形成論に重点が置かれるようになり、邪馬台国に関してもそのような視点に立った議論が多くなりました。

◇江戸時代から綿々と続く邪馬台国の所在を明らかにしようとする研究を、空間軸に基づいた議論とするならば、唯物史観による国家形成論は時間軸に視点を置いた研究ということが言えましょう。つまり邪馬台国を日本の国家形成の過程のどこかに位置づけようとするもので、古代史に限らずこうした歴史観には唯物史観が大きく影響しています。

◇次に考古学の進展が挙げられます。特に考古学者によって鏡や古墳の発掘実績を踏まえた邪馬台国位置論が展開されるようになりました。ここで興味深いのは、考古学者には畿内論者が多いことと、唯物史観論者は考古学を重んじる傾向があったことです。

◇邪馬台国位置論については、内藤白鳥論争以降ほぼ議論が出尽くした感がありましたが、東遷説や放射式解読法が登場して九州説を補強する一方、考古学が同範鏡論を唱えることによって畿内説を強固に

支持するといった動きが注目されます。

《昭和後期—昭和40年以降》

◇この期の特徴は、邪馬台国所在地論に関してアマチュア史家が参入してきたことが挙げられます。この頃になると史学界においては、邪馬台国の位置に関する材料が出尽くして、よほどの遺跡・史料が発見されない限り、新たな展開は望めなくなっていました。昭和30年代後半の古代史ブームもあって邪馬台国位置論へのアマチュア史家の参画が目立つようになりました。この現象を三品彰英は邪馬台国の商品化と呼んでいます。

◇史学者たちは所在地について論考すると、それがアマチュアとの論争になりかねなくなるので、これを忌避しようとする傾向がありました。アマチュア史家参画のきっかけを作った松本清張は、「邪馬台国問題のシンポジウムなどでは学者の司会は互いに遠慮しあい、突っ込んだシンポジウムにならない」(清張日記)と批判をしています。松本は「小説家としてではなく一人の研究学徒として邪馬台国論争に参入した」とその意気込みを表しており、確かに彼の説には史学者たちも一目置いていました。しかし学者から見れば彼はあくまでもアマチュアでした。学者たちにしてみれば、アマチュアと本気で論争する気にはどうていなかっただけで、松本が言うシンポジウムなどで学者が積極的に発言しなかったのにはそうした事情があったものと思われま

◇こうして学界における邪馬台国問題は、位置論から古代国家形成の視点に基づく研究対象(必ずしも唯物史観に立脚するものばかりではない)が中心となっていく一方、位置論や倭人伝解釈などについては、アマチュア史家達の知的探求心を満足させる格好の材料になっていきました。

◇なお唯物史観は教条的であることや理論の硬直性などが指摘されるようになり、昭和期末ころには徐々に勢いが弱まっていきました。またアマチュア史家をも巻き込んだ所在地論争は、昭和40年初めころからほぼ20年続きましたが、論争の種がほとんど尽きたこともあって、こちらも昭和が終わるとともに終焉を迎えました。これは邪馬台国の所在地がいくつであるかというテーマについて人々の熱が冷めたということで、邪馬台国そのものの研究が下火になったわけではないのは言うまでもありません。

在野の研究者達が発表した邪馬台国論は、学問の

大衆化という点では大いに貢献しましたが、その多くの論旨は先人達の研究の域を出ておらず、また既存の説を都合よく取り入れて独自の説を展開したものが少なからずあったようです。

◇こうした経緯をたどりつつ、史学界では、昭和が終わるところから唯物史観においては虚構とされていた記紀を中心とした文献史料に対する新たな研究が展開されるようになりました。

◆本稿では、昭和期における邪馬台国研究のうち、唯物史観にかかわる生口論争と唯物史観に基づく邪馬台国論の代表例として、藤間生大の「埋もれた金印」の概要に触れます。所在地論に関しては特に話題となった注目すべき学説(邪馬台国東遷説・放射線式読法・三角縁神獣鏡=卑弥呼の鏡説など)を紹介します。アマチュア史家の参画については、そのすべてに言及することはとてもかなわぬことですので、その発端となった松本清張の主張を取上げることとします。了。

ゼミ会場と時間 13:15~16:50

1、全水道会館 中会議室(5階)

2、全水道会館(8階建てビル)へのアクセス

①JR水道橋東口(お茶の水駅寄り)下車、北方向へ神田川を渡り、徒歩2分。

②都営三田線水道橋駅下車A1出口より北方向へ徒歩1分。○電話:03-3816-4196

10月1日外部講師の講演について

1、鈴木靖民先生(國學院大學名誉教授・前横浜市歴史博物館長)

2、テーマ:古代国家形成と東アジアの概観

3、鈴木先生からの推薦図書

「鈴木靖民編著『日本古代交流史入門』

(勉誠出版、2017年)」

4、尚、講演内容を記した事前紹介文の掲載や講演当日の資料配布は、ありませんのでお含み置き下さい。以上。

道鏡は悪僧か、政争の犠牲者か

—清野敬三会員記—

◇はじめに◇

道鏡は古来、天皇の地位を覬覦した悪人の見本とされてきた。さらには、巨根伝説が生まれ妖僧・怪僧となり、称徳女帝との関係を川柳で面白可笑しく風刺され、嘲笑の対象にさえなっている。

道鏡の生きた奈良時代は「咲く花の匂ふが如き」華や

かなイメージがあるが、その実、皇統をめぐる勢力争いから陰惨な誣告事件が立て続けに起こっている。当時の時代的背景や女帝との関係などから、その人物像を見直してみたい。

◇生い立ち◇

道鏡は、出生の年月も両親の名前も分からない。ただ『続日本紀』(以下『続紀』)に「俗姓は弓削の連、河内の人なり」とあるから、弓削氏の一族で、河内国の生まれであることは分かる。弓削氏は名前のおり弓造りに従事する部の伴造である。『新撰姓氏録』によると、弓削連は物部連と同祖とされる。ただし、弓削氏は物部氏の勢力下にあり、弓削氏の中でも道鏡の家は傍系で、格は一段と低かったとみられる。

道鏡の出自には皇胤説もある。喜田貞吉氏の説で、天智天皇の皇子施基親王の第6子とするものである。しかし、和氣清麻呂の神託報告では皇緒以外の日嗣が否定され、女帝も道鏡本人も諦めたわけだから、皇胤でないことは明らかである。

◇道鏡の仏教修行と出世◇

道鏡は、法相宗の重鎮義淵に師事し、さらに葛城山に籠り如意輪法を修し苦修錬行の生活を送ったとされる。葛城山は修験の霊場であり、ここで病氣治療などの呪験力を身につけた。義淵没後は同じ門下の良弁に師事し、東大寺造営に際して良弁の使僧をしていた文献が、「沙弥道鏡」の署名で残っている。

『続紀』の小伝に「略梵文に渉りて、禪行を以て聞ゆ」とあり、独学でサンスクリットを身につける一方、難行苦行の禪行を積んだことで人に知られるようになったことが分る。知識欲に燃えた相当な努力家であったと云えよう。これらが評価され、道鏡は内道場に入ることを認められた。内道場とは、宮中に設置された仏事を行う場所で、そこに供奉する僧侶を内供奉と云う。一介の沙弥から、内供奉という高僧の一人に出世をしたことになる。内道場には、天皇などの病気を治療する看病禪師がおり、道鏡も葛城山で修行した医療技術により看病禪師となった。

◇天平期の内乱と政争◇

天平の時代は、皇統をめぐる氏族間の勢力争いに絡み隠微な内乱が多発し、道鏡も政争の影響を大きく受けている。

天平元年(729)藤原系の光明子立后を図る藤原氏の策謀で、長屋王一族が自害に追い込まれる事件が起きた。その藤原4兄弟が疫病で死亡し、橘諸兄が首班に

なると藤原広嗣の反乱も起きた。その間、聖武天皇は各地を彷徨するなど常軌を逸した行動をとり政界は混乱する。また皇位継承の有力候補安積親王が怪死し、藤原仲麻呂の仕業かと疑われている。

仲麻呂は、光明皇后の信任に支えられて権力を掌握する。天平勝宝8年(756)聖武の遺詔により道祖王が皇太子となるが、翌年廃され大炊王が立太子する。仲麻呂の専横に憤激して橘奈良麻呂の乱も起きた。天平宝字2年(758)孝謙女帝は大炊王(淳仁天皇)に譲位し、仲麻呂は惠美押勝と賜姓され、大師に任ぜられ位人臣を極める。

◇道鏡、女帝との出会いから法王へ◇

孝謙女帝は近江の保良宮に滞在中に病を得た。そこに呼ばれたのが看病禪師道鏡である。宿曜秘法という呪験力による治療を施し病気を治した。これが道鏡と女帝との出会いで、天平宝字6年(762)のことである。

道鏡は、仏法の師として女帝から尊敬と信頼を得た。44歳の孤独な女帝は道鏡を寵愛し、その醜聞が宮廷の内外に取沙汰されるようになった。これを淳仁が諫言したため女帝は怒り、淳仁の天皇権限を小事だけに制限した。道鏡は異例の大抜擢で、少僧都に任じられた。少僧都は僧侶全体を取締り、仏教行政を管轄する僧綱の官職である。

仲麻呂は、女帝の寵愛が道鏡に移ったことに危機を感じ、天平宝字8年(764)謀反を企てたが敗死した。淳仁は淡路に幽閉され、女帝が称徳天皇として重祚した。女帝は、道鏡を新設の大臣禪師に任じ、翌年太政大臣禪師の位を受け、さらにその翌年仏舎利の出現を機に法王の位を受けるに至った。

◇宇佐八幡の神託事件と道鏡失脚◇

道鏡が法王になって3年目、神護景雲3年(769)に神託事件が起きた。大宰主神の習宣阿曾麻呂が宇佐八幡の神託と称して「道鏡を皇位に即かしめば、天下太平ならむ」と奏上した。そこで女帝は、和氣清麻呂に宇佐の神教を聞いてくるよう命じた。ところが清麻呂の復命した託宣は「天つ日嗣は必ず皇緒を立てよ」であった。清麻呂は神託を偽ったとされ因幡員外介に左降され、さらに女帝の詔により大隅国へ配流された。

神託事件の翌年、女帝は亡くなり高野陵に葬られた。女帝の庇護を失った道鏡は陵下に留まり、墓守を続けた。そうした中「奸計あり」という坂上菟田麻呂の密告により、道鏡は造下野国薬師寺別当に左遷され、1年8か月の後、無位無官の庶民として死亡した。

◇神託事件の真相についての諸説◇

事件の経過については史料により大差はないが、首謀者を誰とみるかで諸説が分かれる。

『統紀』は事件の張本人を道鏡とする。道鏡自らが皇位への野望を抱いた悪人であり、それに阿^{おもむ}った八幡神職団が神託を奏上し、これを忠臣の清麻呂が阻止したとする。

「人物叢書」の横田健一氏は、通説に沿って道鏡を張本人とし皇位を望んだ悪人としている。ただし、女帝は阿曾麻呂奏上の神託を意外に思い、驚き悩んだ末に受け入れ難かったとみる(『道鏡』吉川弘文館)。

「学術文庫」の北山茂夫氏は、神託は宇佐八幡大神の禰宜大神杜女と田麻呂により発想されたとする。女帝は皇嗣について嫡系主義的正統観を持っていたが、仏法が俗界の王法に優先すると考え、道鏡に皇位を譲る決心をした。道鏡も女帝の意向を受け、天位を熱望するに至ったとみる(『女帝と道鏡』講談社)。

「敗者の日本史」の瀧浪貞子氏は、阿曾麻呂を事件の首謀者とみる。宇佐八幡内部の主導権争いに絡み神託を捏造したのが発端とする。女帝は草壁皇統を遵守することを捨てきれず、清麻呂の託宣により道鏡の即位願望を断念させたかった。清麻呂を処罰したのは、その報告に「無道な人は早^{すみやか}に掃^{はら}ひ除くべし」という道鏡を誹謗する余計な文言があったため激怒したとする(『奈良朝の政変と道鏡』吉川弘文館)。

以上とは別の視点から、藤原氏が、道鏡を失脚させるために清麻呂らと共謀して企画したという説もある。喜田貞吉氏の説で、坂口安吾氏もこの線で小説を書いている(『道鏡』角川文庫)。藤原百川らが、道鏡に天皇への野望を起こさせ、それを機に失脚させようとしたという筋書きである。

◇神託事件は女帝が主導(私見)◇

総じて既存の説は、皇位覬覦の罪を女帝に負わせないために、女帝の関与を少なくしているように見える。しかし、当時の律令制の下では天皇の権力は絶対であった。この事件は女帝の意思が基本にあり、それに阿^{おもむ}って神託が起こされたものと思う。

女帝は草壁皇統直系を護るという正統観を持っていたが、それと道鏡への愛情との葛藤に悩んでいた。しかし、孤独の身で直接の後継者がおらず、道鏡への尊敬と深い愛情が勝り、その寵愛がエスカレートし、ついに皇位を譲ろうと決心するに至ったもので、道鏡擁立はあくまで女帝の意思であったと私は考える。

なお、藤原氏陰謀説は、女帝没後の皇位継承でみせた百川らの謀略を考えると説得力のある話ではあるが、意図とは逆の神託を捏造するなど、あまりにも手が込み過ぎている。

◇道鏡の仏教政治と人となり◇

道鏡が大臣禅師・太政大臣禅師から法王になり、女帝が亡くなるまでの6年間を、一般に道鏡政権と云う。『統紀』は「道鏡、権を擅^{ほしいま}にし、軽^{かる}しく力役を興し、努めて伽藍を繕^{つくろ}ふ。公私に彫喪^{ちゆうそう}(疲弊)して、国用(国の費用)足らず。」と道鏡政権を酷評している。しかし、天武系皇統を倒した桓武朝の史書であり、顔面どおりには受け取れない。

道鏡政権は仏教政治と云われるが、仏事が多い他は、それらしい特質は極めて薄く、ことさら仏教政治と規定すべき特徴は殆どない。独自の政策色はみられず、道鏡は性格的にも政治家には向いていなかったのではないか。女帝の死後も反対派への対抗策を講ぜず、ひたすら山陵に供奉し勤行を続けたことから想像できる。

道鏡の地位は「位」であり、世俗的な職務は伴わないことを女帝は強調しており、行政職の実務は、藤原永手や吉備真備が行っていた点も留意する必要がある。また、道鏡は、弓削一族をことさら重用したとも非難される。確かに弟の浄人は従二位大納言にまで昇りつめたが、浄人以外は五位以下の中下級官人どまりである。人材不足で、とても他氏に対抗する力にはならなかったのが実情だろう。

道鏡は、むしろ政治権力には恬淡であり、女帝に忠実に奉仕した、いや奉仕し過ぎた実直な僧侶だったように私には思える。

◇付記—巨根伝説—◇

「道鏡は座ると膝が三つでき」などをはじめ、江戸川柳には道鏡の巨根を揶揄した作品が多数ある。このため、道鏡は嘲笑の対象になって損をしている。話の元はどうも鎌倉時代に書かれた『古事談』や『水鏡』にあるらしい。女帝の死因は山芋が抜けなくなったため、という荒唐無稽な話から派生したものであり根拠はない。

さらに性を笑話化した露骨な江戸川柳も沢山あるが、自称品格を重んずる当講座ではここでの紹介を憚る。学問的興味をお持ちの方は、法制史学の泰斗瀧川政次郎氏の随筆集『池塘春草』をどうぞ。江戸時代は將軍に対する批判はご法度であったが、天皇への不敬罪はなかった。庶民は雲の上の女帝を俎上に載せて、その醜聞を楽しんでいた。以上